

自選「作家の旅」
遠藤周作

● 1977.8.1. 第一刷

● 著者 遠藤周作

● 発行者 川崎吉光

● 発行所 株式会社 山と溪谷社

東京都港区芝大門一丁目三三 郵便番号106

電話 東京(03)四三六四〇二 *代表

振替口座 東京八六〇二四九

● 装幀 井上敏雄

● 印刷所 明善印刷株式会社

● 製本所 株式会社明光社

自選作家の旅
遠藤周作

山と溪谷社

口絵写真Ⅱイスラエル、ガリラヤ湖畔にて——撮影・泉秀樹

自選「作家の旅」遠藤周作
目次

自序——イエスの足跡を追って 7

I ————— 27

四等船客のフランス旅行 29

フランスの女学生・俗語 41

ペナン島の異邦人 54

石に囲まれた街で 66

サド侯爵の城 72

旅の日記から 78

II ————— 89

エルサレム巡礼 91

キリストの土地 97

死海を訪れて 111

ローマ法王謁見記 115

ぼるとがる紀行 121

ガンジス河とユダの荒野 136

III ————— 149

違和感のない街——ニューヨークにつ 151

ニューヨークのハムレット 155

野間宏ソ連同行記 159

異郷の日本人 167

カンテラ 171

IV ————— 175

関東小豪族の悲劇を象徴する箕輪城 177

切支丹の哀史を秘める日之枝城 190

タイム・マシンで見た清洲城 205

水攻め、高松城をめぐる武将たち 218

小浜城に残る伊達政宗の戦略秘話 231

V ————— 243

日記——フェレイラの影を求めて 245

弱者の救い——かくれ切支丹の村々 257

横瀬浦、島原、口之津 283

初出一覧 ————— 298

あとがき ————— 301

自序

イエスの足跡を追って

旅の本質は——結局、巡礼になる。巡礼とは聖なる場所に赴くための旅である。それはまるで我々の人生そのものではないか。人生が最終的に聖なる場に赴く旅ならば、人生は結局、巡礼だとも言えるからだ。

私はさまざまな旅をしたが、エルサレムには数回、行った。それは私にとっては取材と共に巡礼であり、それは旅の本質をあらわす旅行でもあったのだ……。

私は今、イエスを主人公にした長編とイエスの生涯を書いた伝記的エッセイを脱稿したばかりである。

この小説とエッセイを書きあげるまで五年ちかい歳月を要したが、その間、六回にわたってかつてイエスがそこで生きられたイスラエルに赴いた。

もともとそれ以前に行った時は六日戦争の前だったのでエルサレムでさえもヨルダン領とイスラエル領に分割され、片一方に足を踏み入れれば、もう一方には入れないというありさまだった。私はほとんど何も見ず、引きあげねばならなかった。

その後、イスラエル側はエルサレムも南の砂漠も接收してしまったからイスラエル側のヴィザで聖書に出てくるほとんどの場所は歩きまわることができた。エルサレム市内もすべて知ることができた。

エルサレムには巡礼団や観光客がまわる聖所コースがある。イエスが裁判をうけたピラトの城塞の敷き石や今は丘というより平地にひとしいゴルゴタの丘、最後の晩餐の家、ゲッセマニの園などには絶えまなく巡礼団や観光客がやってくる。

だが、これらの場所が正確かという点、必ずしもそうではない。古くからの言い伝えだけでその場所がそうだろうと言われているだけで事実を学問的に裏づけるものはない。聖書考古学者たちが一様に肯定しているのはゴルゴタの丘やベテスダの池ぐらいなものであとは異論をたてる学者もあれば、あきらかに出鱈目なものもある。

エルサレムの旧市街の汚水と家畜の糞でよごれた狭い路には「ここで十字架を背負ったイエスが倒れ給うた」と書いた、いわゆる十字架の道ゆきの一つ一つの銅版が壁にはめこまれているが、これなどは全く嘘である。イエス時代のエルサレムはその後、徹底的に破壊され、その残骸は現在の市の五十メートルほど下に埋もれているからだ。

最初、それを教えられた時は言いようのない失望感と幻滅とを感じた。私は小説家としても、イエスが歩かれた路、イエスが坐られた場所をこの眼で見、この手で触れたかったからである。だが事実のそうだった路も場所も今はさまざまな物に覆われ、残骸だけが地下に眠っている。エルサレムは基督教だけでなくユダヤ教にとっても回教徒にとっても聖地であるので、考古学者は容易に発掘できないのだ。

事実のイエスの足跡はエルサレムに発見されないだけでなく、彼が布教したガリラヤ湖畔にも見つけるのはむづかしい。聖書にはカペナウムとかコラジンとか、ベッサイダというようなガリラヤ湖畔の町の名が出てくるし、当時の史家ヨセフ・フラビウスの本などを読むと、そこに「二百四十の町村があった」と書かれてはいるが、現在そこを訪れる旅人はただユーカリの林が茂り、赤いコクリコの花の咲く岸を見るだけで、それらの町はあとかたもなく消えている。

カペナウムとかベッサイダの町の跡と言われる場所もあることはあるが、それも学者によって位置がちがう。我々はただ岸边に腰をおろし、陽に光る湖とそれを囲む山波をみながら、そこだけは往時のままだと思ふより仕方がないのである。

イエスの事実の足跡はエルサレムでもガリラヤ湖畔でも地下ふかく、かくされている。私はそれを知った時、同時に聖書のことを考えた。

今日、多くの聖書学者たちの研究で、我々は新約聖書がイエスの生涯を正確に記録したものではないことを知っている。

聖書学者たちによれば、イエスの死後、かなりの歳月の後に書かれた

聖書はもはや現在には消滅したイエス語録を取り入れながらそこに原始基督教団の信仰から生れた創作をまじえて執筆されたと言つてよいのである。したがつてイエスの本当の生涯は必ずしも聖書にそのまま記述されているのではなく、そこにイエス信仰から生れたさまざまな創作場面が付加されている。

したがつてこれらの学者の代表者の一人、ブルトマンによれば史的イエス（事実のイエス）はさぐればさぐるほど困難になつてくるとも言えるのだ。つまり現在のイスラエルには真のイエスの足跡が地中ふかく埋められて、地上には伝承や裏づけのない巡礼地だけが散在しているように、聖書のなかにさえも、正確なイエスの生涯は原始基督教団の信仰から創られた付加物に覆われてしまつていてと考へてもいいのである。

聖書学者たちがそれぞれの研究成果に基づいて書いたイエスの生涯を私は今日までかなり読んできた。悲しいことにはそれらの一つ一つはたがいに食いちがう。この聖書に記述されている場面はたしかに本当のことだとある学者が言っているが他の学者はそれは後世の創作だと否定する。聖書学者ではない我々はその是非を判定する能力はないから、ただ

途惑うより仕方がないのである。

イスラエルをたびたび訪れた私はエルサレムの陽光きびしい街角で、あるいはガリラヤ湖の岸辺で、もう、そろそろ、その途惑いから脱却せねばと思った。一体、本当のイエスの生涯はどんなものだったのか。それを私は私なりに掴んでみたいと思った。歩きつかれてホテルに戻り、鞆に入ってきた最近の聖書学者のイエス伝をひらくと、そこにはイエスはローマに征服されたユダヤ人たちのために民族闘争を起し殺された指導者のように書いてある。別の本にはそれを否定してイエスは民族闘争を越えた世界を開こうとしたとも書いてある。イエスの生涯がこのように謎になってしまった時代は今ほど歴史のなかでなかったであろう。

だが、たしかにイエスはここで生きておられたのだと、私は丘のホテルの窓からエルサレムの街をみおろしながら、たびたび思った。日本の一小説家としては、その生涯を知りたかったのである。

イエスの足跡は埋没してしまっているが彼が眼にされた自然の風景だけは当時のままである。こうしてイスラエルに幾度か訪れるたびに私

の足はいつかエルサレムよりもその南に荒涼として拡がる荒野に向うようになつてしまつた。

地球の陸地のなかでもっとも低い地点と言われるこの荒野はイエスの時代から今日までほとんど何ひとつ變つていない。何千年の間、そこはいつもそのままだったように一木だにない褐色の丘陵と髑髏に似た禿山とがきびしい陽にさらされ、静まりかえつた荒野には一本のアスファルト道が強い意志のように走っているだけである。一匹の魚も住まぬ死海のほとりにはイエス時代にここで孤独な集団生活を行ったエッセネ派の修院の跡が風に吹かれながら残っている。

今はおそろしい沈黙に閉ざされたこのユダの荒野はしかしイエス時代は預言者が人間の悔い改めを叫び、征服者ローマに反抗するユダヤ人たちがひそかに反乱を企てた場所でもあつた。そしてイエスもまた故郷のナザレを捨てて、この荒野で最初の修業と自己発見をされたのである。

イエスが身を投じられたのは、聖書にも記述されている通り、この荒野を流れるただ一つの川、ヨルダン川で洗礼運動を行っている洗者ヨハネ教団であつた。彼が洗者ヨハネの弟子となり、自分も洗礼を受けられ

たことは聖書を読んだ者なら誰でも知っている。

しかし私はこのユダの荒野を訪れるたびに、聖書に書かれていることとは別のことを少しずつ考えはじめた。私はイエスがやがて洗者ヨハネ教団に身を投じられたことよりも、それを離脱された原因に興味を憶えるようになったからである。私の考えではこの原因のなかにイエスの自己発見と独自性があるように思えたのだ。

詳細はやがて上梓される「イエスの生涯」にのべたから、それにゆずることにする。結論から先に言うとイエスはこのユダの荒野や、そこから生れたエッセネ派や洗者ヨハネ教団の「神のイメージ」に反抗されたのである。

きびしい陽光にさらされ、怖しい沈黙に閉ざされたこの死海のほとり。人間を威嚇するような褐色の山々のひろがり。そこには何の心を慰めるものはない。ここで修業した孤独な教団がその風景から神のイメージを怖しいものと考えたのは無理もない。洗者ヨハネはこの荒野から毛の衣を着て皮帯をしめ、人々に神の怒りと神の罰と人間の悔い改めとを説いた。